

スポーツ・ツーリズムを題材とした高等学校 「地理探究」における単元構想の開発 — 冬季五輪・アジア開催地を事例として —

Development of Unit Concept in High School 'Geography Exploration'
with Sports Tourism
— Case Study of Winter Olympics / Asia Venue —

菊 地 達 夫
Tatsuo KIKUCHI

I. はじめに

近年、日本を含む東アジア地域において、世界的なスポーツイベントの開催が、相次いでいる。例えば、2018年は、韓国平昌の冬季五輪の開催、2019年は、ワールドカップラグビー日本大会の開催、また、2020年には、東京の夏季五輪、2022年は、北京の冬季五輪が開催予定である。それ以外にも、世界的なスポーツイベントは、種目別において各地で開催している。加え、パラリンピックをはじめ、障がいのある方のスポーツイベントにも注目が集まっている。

このような世界的なスポーツイベントの場合、経済的効果を期待し、旅行商品の企画・開発が増加している。具体的には、大会開催中、他地域の人々が訪れ、直接の競技を観戦するといったものである。合間に滞在地（周辺）の観光施設や食文化を併せて堪能できるような企画も多い。

こうした変化に伴い、観光学はもちろんの

こと、スポーツ科学や地理学といった学問において、スポーツ・ツーリズムを対象とする研究分野が、広まるようになった。

すでに述べたとおり、スポーツ・ツーリズムに関する研究は、スポーツ科学、観光学、地理学等でみられる。例えば、地理学では、スポーツ空間の形成（ヨットクラブ、テニス民宿観光地）、スポーツ空間の立地（スキー場、野球場）、スポーツ空間と文化の関係性（サーフィン・ランニングとジェンダー）といった研究において生産されている。スポーツ科学の場合、スポーツ・ツーリズムの定義が多様なため、内容の整理をしながら、その規定を目指す研究が進められている。

他方、地理教育では、観光を取り上げる授業開発は見られようになったものの、まだその数は少ない。井田（2018）は、高等学校「地理探究」における「交通・通信、観光」の内容と地理的な見方・考え方を確認した後、地域間の結びつきや場所の特性を働かせた観光（観光客発生空間構造）の学習内容を提案

した。ただ、スポーツ・ツーリズムを題材とした高等学校の地理授業（地理探究）の開発は、ほとんど確認できない。

以上から本稿は、高等学校地理歴史科「地理探究」の科目において、スポーツ・ツーリズムを題材とした単元構想の開発を行うものである。学習指導要領の場合、観光という言葉は、小学校社会科（第4学年）に続き、高等学校地理歴史科「地理探究」でも登場した。具体的には、新学習指導要領の「交通・通信、観光」の単元で、「観光」が追記となった。

今回は、この観光の事象として、スポーツ・ツーリズムに着目し、冬季五輪のアジア開催地を取り上げる。冬季五輪の開催地の決定は、多額な財源の確保・安定に加え、地域自然環境による制約も大きい。ゆえに、人文・社会環境と自然環境の双方に深く影響する。また、開催地間の比較も可能となる。さらに、積雪

の確保やスポーツ施設の開発は、地球環境問題に関連しやすい。よって、冬季五輪の開催地の選定は、地理教材として適当であるものと考えた。

Ⅱ. スポーツ・ツーリズムの特色

本章では、まず、スポーツ・ツーリズムの対象について確認しておく。続いて、地理教材として活用する冬季五輪のアジア開催地の概要を述べる。

1. スポーツ・ツーリズムの対象

本節では、工藤康宏・野川春夫（2002）の成果を手がかりとして、スポーツ・ツーリズムの対象を整理しておきたい。この研究は、試験的にスポーツ・ツーリズムにおける研究枠組みと題して、スポーツをどのように捉え

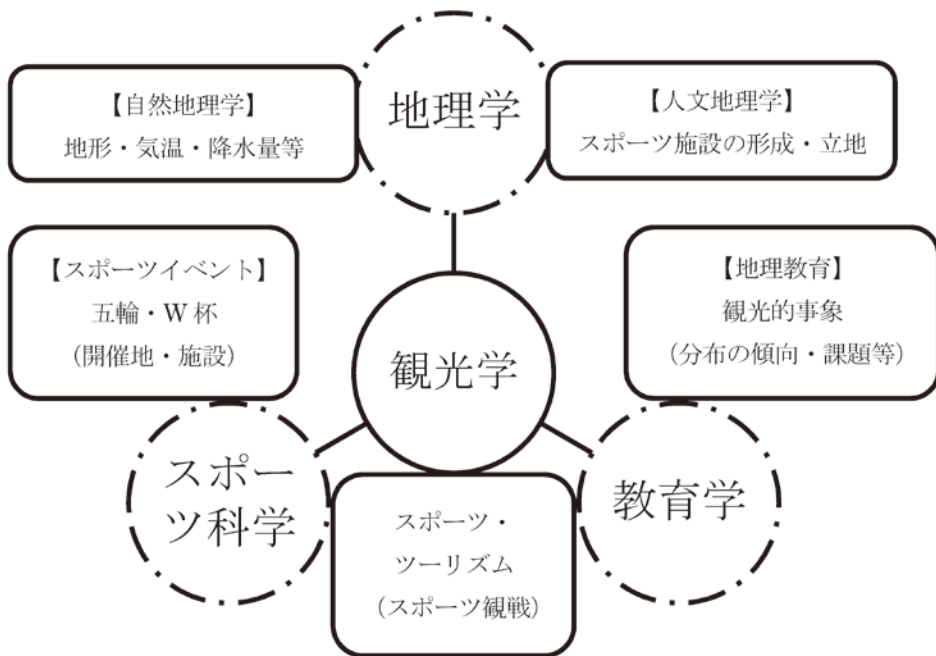


図1 本研究における関連分野の関係性

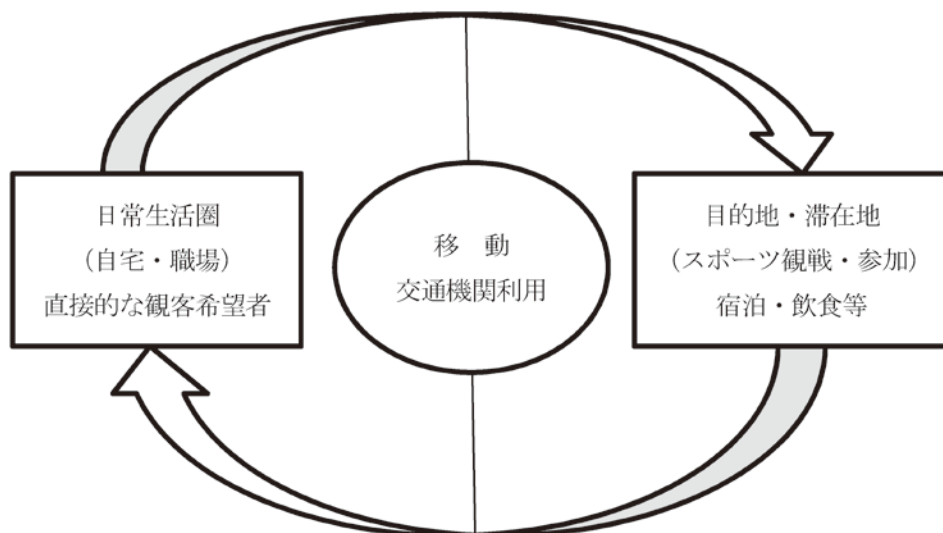


図2 スポーツ・ツーリズムの範囲・対象（イメージ）

ていくかを検討したものである。その背景として、これまでスポーツ・ツーリズムの研究の中ではスポーツについての検討があまり為されていないことを指摘している。その結果、どこまでの範疇をスポーツ・ツーリズムの研究対象として扱うのか明確でなかったことを強調する。また、スポーツがあるいは、スポーツイベントが観光資源となりうるのかについても定かではなかったことを挙げた。

研究の結果、スポーツを観光資源の一つとみなすことで、スポーツ参加行動の解釈の幅が広がるのではないかということを示唆した。また、スポーツ・ツーリズムの対象は、いくつかの先行研究におけるスポーツ・ツーリズムの定義を整理し、①スポーツあるいはスポーツイベントへの参加または観戦を主目的としていること、②日常生活圏を離れ旅行することの2点であると指摘した。具体的には、日常生活圏（自宅・職場）を起点として、目的地または滞在地となる場所で、スポーツの

参加・観戦を伴う活動をスポーツ・ツーリズムのモデルと考えた。その間の移動は、交通機関を伴うものとなっている。よって、競技者・選手を含む直接の観客が、対象者となる。

筆者も、上記の研究結果をスポーツ・ツーリズムの対象(定義)として、位置付けておく。

2. 最近における冬季五輪の開催地の地域的特色

本節では、最近における冬季五輪の開催地を取り上げ、どのような地域的特色がみられるか、確認しておきたい。2018年の韓国平昌を境に、前回2014年はロシアのソチ、次回2022年は中国の北京である。日本の場合、1940年の札幌は、開催が決まっていたものの、第2次世界大戦により中止（返上）となり、1972年が、冬季五輪の開催として最初であった。次に、1998年の長野において、2度目の冬季五輪の開催地となった。現在、2030年の招致目標として、札幌が検討をすすめている。

近年の開催地は、東アジア地域に偏りがあ

る。地理的位置でみた場合、北緯40度前後の都市が多く、欧米各都市と比べ、やや低緯度の開催地が続いている。平均気温や2月降水量を比べると、ややばらつきはある。ただ、積雪環境という点でやや厳しい開催地も見られる。例えば、次回の中国北京は、夏季（2008年開催）と冬季双方の初めての開催地となる。他方、北京周辺は、気温は低いものの、降雪がほとんどない。それゆえ、スキー場は、ほ

とんど人工雪で確保する予定となっている。大半を人工雪で実施する冬季五輪は、初めてとなるであろう。

よって、冬季五輪のあり方に、新たな環境問題を生じさせる危険性もある。

Ⅲ. 高等学校地理歴史科「地理探究」における単元構想

本章では、①新課程における「地理探究」

表1 最近における冬季五輪の開催地に関する地理的情報

第22回	2014年	ロシア・ソチ	北緯43度	2014.02.07～02.23	88	参加国数98
気 温	マイナス12.6度	2月降水量	135mm	平均降雪日数	6	
第23回	2018年	韓国・平昌	北緯37度	2018.02.09～02.25	92	参加国数102
気 温	マイナス10.9度	2月降水量	50.1mm	平均積雪深	26.9cm	
第24回	2022年	中国・北京	北緯39度	2022.02.04～02.20		
気 温	マイナス4.5度	2月降水量	4.4mm			
第11回	1972年	日本・札幌	北緯43度	1972.02.03～02.13	35	参加国数35
気 温	マイナス6.6度	2月降水量	94mm	平均降雪日数	25.6	
第18回	1998年	日本・長野	北緯36度	1998.02.07～02.22	72	参加国数68
気 温	マイナス3.8度	2月降水量	49.8mm	平均降雪日数	19.6	
第5回	1940年	日本・札幌	北緯43度	第2次世界大戦のため中止（返上）		
第26回	2030年	日本・札幌	北緯43度	開催地立候補予定（2026年度より移行）		

資料) 各種資料より作成。

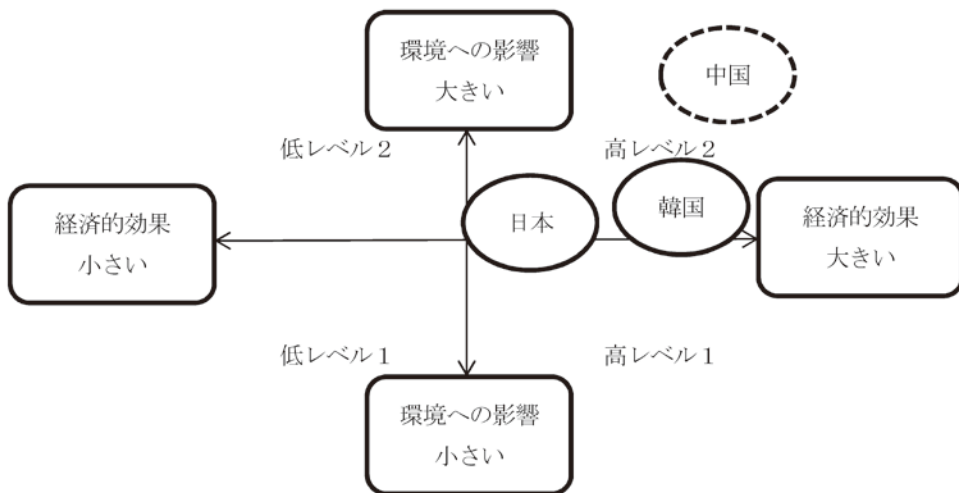


図3 アジア冬季五輪の開催地（国）の経済・環境への影響（可能性）

の位置付け, ②「地理探究」における単元構想の提示, ③単元構想の意義の順で述べる。

1. 「地理探究」の位置付け

新課程(2023年以降完全実施)における「地理探究」の科目は, 日本史探究と世界史探究と並ぶ3単位の選択科目である。必履修科目(2単位)である地理総合や歴史総合の修得後に学習する科目として位置付けられている。

周知のとおり, 新課程における社会系教科の特色は, 小中高を通じた一貫性の明確化にある。小学校の場合, 単元の内容が, 地理的内容, 歴史的内容, 公民的内容のうち, どの内容に中軸を置くものか示された, その結果, 中学校社会科の各分野への接続が, より鮮明となった。

他方, 社会系教科の有する総合性が, 弱体化した。高校の場合, 総合科目と探究科目の分野毎の接続は明確になったものの, 地理と

歴史の融合という点で課題が残った。

以上から, 「地理探究」は, 地理学習の総まとめとしての役割が強い。同時に, 歴史総合の成果を, どのように組み入れることができるか, 課題となろう。加え, 大学教育を含む生涯学習へ, 地理学習の成果を, どのように繋ぐことができるかも重要な視点と考えられる。

2. 単元構想の具体

1) 関係する学習指導要領の内容

ここでは, 単元構想に関係する学習指導要領の内容(表2)について確認する。すでに述べたように, 高等学校地理歴史科の「地理総合」2単位(必履修科目), 「地理探究」3単位(選択科目)のうち, 観光の文言を確認できるのは, 「地理探究」のみである。

具体的には, 系統地理的アプローチの「交通・通信, 観光」の内容で登場した。従前の

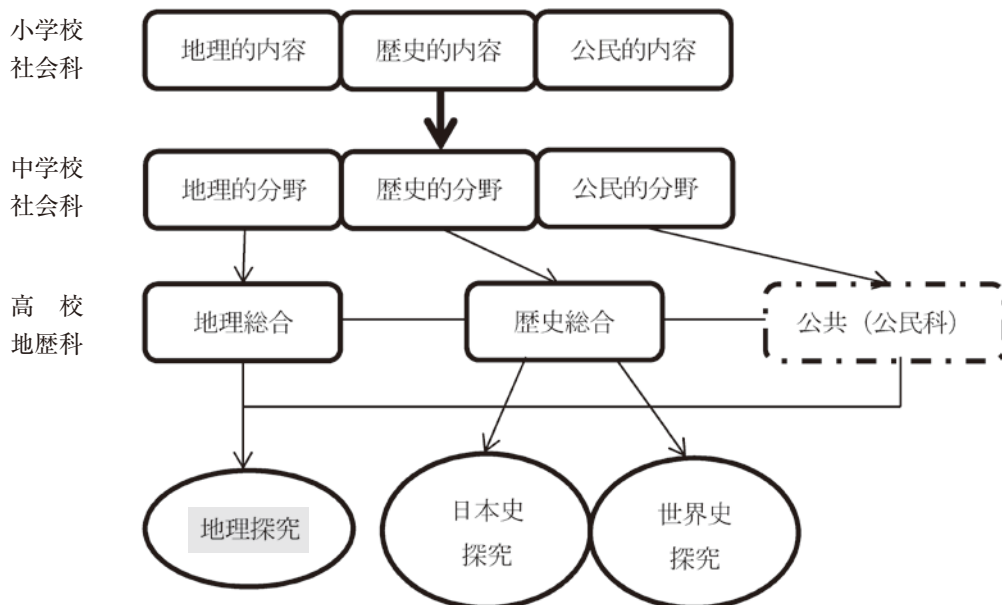


図4 社会系教科の内容・分野・科目における関係性

表2 地理探究の「交通・通信、観光」に関係する学習指導要領（解説を含む）の内容

<p>【交通・通信、観光】本文</p> <p>場所や空間的相互依存作用などに着目して、課題を追究したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。</p> <p>ア 次のような知識を身に付けること。 (ア) 交通・通信網と物流や人の移動に関する運輸、観光などに関わる諸事象を基に、それらの事象の空間的な規則性、傾向性や、交通・通信、観光に関わる問題の現状や要因、解決に向けた取組などについて理解すること。</p> <p>イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。 (ア) 交通・通信網と物流や人の移動に関する運輸、観光などに関わる諸事象について、場所の特徴や場所の結び付きなどに着目して、主題を設定し、それらの事象の空間的な規則性、傾向性や、関連する地球的課題の要因や動向などを多面的・多角的に考察し、表現すること。</p>
<p>【上記に関係する解説部分】</p> <p>この中項目は、場所や空間的相互依存作用などに関わる視点に着目して、交通・通信、観光に関わる諸事象を多面的・多角的に考察し、表現する力を育成するとともに、交通・通信、観光に関わる諸事象の空間的な規則性、傾向性や、関連する地球的課題の現状や要因、解決に向けた取組などを理解できるようにすることが求められている。</p> <p>この中項目における場所に関わる視点としては、例えば、交通・通信網と物流や人の移動に関する運輸、観光などに関わる事象を、その事象が見られる場所の地理的環境の共通点や相違点との関わりから捉えることなどが考えられる。</p> <p>また、空間的相互依存作用に関わる視点としては、例えば、交通・通信網と物流や人の移動に関する運輸、観光などに関わる地球的課題の要因や動向を、個々の事象の地域的な結び付きや広がりから捉えることなどが考えられる。</p>

資料) 高等学校学習指導要領解説地理歴史編。

表3 単元計画（6時間構成）

【知識・技能】6-1 観光などに関わる諸事象を基に	【各単元の主な学習内容・展開】 近年における冬季五輪の開催地
「思考力・判断力・表現力等」6-1 場所の特徴や場所の結び付きに着目して	<ul style="list-style-type: none"> ・開催地の地理的位置 ・競技施設の分布
「思考力・判断力・表現力等」6-1 主題（問い）を設定し	<ul style="list-style-type: none"> ・アジアの開催地の比較を通じて、どのような地理的分布・条件の違いがあるのか ・その結果、どのような問題がありそうで、どのような解決の取組（方向性）を考えることができるか
「思考力・判断力・表現力等」6-2・3 事象の空間的な規則性、傾向性や、関連する地球的課題の要因や動向などを多面的・多角的に考察し、表現して	<ul style="list-style-type: none"> ・開催地の自然環境の特色（位置、地形、気温、降水量等の地域間比較） ・開催に伴う地域環境問題（可能性）（生態系システムの変容等）
【知識・技能】中心的知識 6-4・5・6 観光に関わる問題の現状、要因、解決に向けた取組などについて理解する	<ul style="list-style-type: none"> ・人工雪主体の開催 ・人工雪に依存する背景（地域事情） ・人工雪多用による周辺地への影響（可能性）（生活・産業用水の不足の懸念等） ・解決に向けた取組（方向性）（開催地決定の基準の見直し・変更等）

地理Bの場合、類似項目で「交通・通信」という表現に留まっていた。新学習指導要領において、観光が追記された。

観光に関する学習内容をみれば、知識・技能では、「観光などに関わる諸事象を基に、それらの事象の空間的な規則性、傾向性や、観光に関わる問題の現状や要因、解決に向けた取組などについて」理解するようになっている。また、思考力・判断力・判断力等では、「観光などに関わる諸事象について、場所の特徴や場所の結び付きなどに着目して、主題を設定し、それらの事象の空間的な規則性、傾向性や、関連する地球的課題の要因や動向など」を多面的・多角的に考察し、表現するようになっている。

以上から、観光的事象の分布傾向（共通性・相違性）の認識と観光に関する地域問題の現状、要因の認識、その解決に向けた提案を期待するものとなっている。

2) 単元構想

続いて、前で確認した関連する学習指導要領の内容にもとづき、単元目標、計画・構成を示す。単元計画・構成(表3)は6時間とした。

単元目標

- 1 アジア地域の冬季五輪の開催地の特色（共通性・相違性）を説明することができる
- 2 冬季五輪の開催に伴う地球的課題の現状、要因、解決を説明・提案することができる

3. 単元構想の意義

単元構想は、冬季五輪の開催地を題材として、関係する事象の地理的条件・要因を考えたしながら、スポーツ・ツーリズムの課題（地球

的課題/環境問題)に気付かせようとするものである。スポーツ・ツーリズムをはじめとする観光活動は、経済的効果が大きいあまり、デメリットとなる課題を取り上げることが少ない。

単元構想は、地理学習を通じて、スポーツ・ツーリズムの発展を見据えつつ、地域課題の可能性に注目させる機会ともなっている。この地域問題は、持続的な冬季五輪の開催を考えた場合、地球的課題として捉えていくべきものである。こうして地球全体を俯瞰し、空間軸の視点に加え、時間軸とりわけ未来も意識した。

今回、韓国と中国で冬季五輪を開催する意味は、単なる東アジア地域の分布というだけではなく、開催国の経済的発展の成果と結びついている。これらは、「歴史総合」の学習成果をふまえることで、より鮮明となるものである。「歴史総合」における近代化、大衆化、グローバル化の学習内容は、韓国や中国の冬季五輪の開催に至った経緯を考える上で欠かせない。よって、地歴融合という視点でも、有効性がある。

Ⅳ. おわりに

本稿では、スポーツ・ツーリズムの教材化を目指し、高等学校地理歴史科「地理探究」において、冬季五輪のアジア開催地に着目して、「交通・通信、観光」の単元構想を開発した。その手順として、まず、スポーツ・ツーリズムの範囲・対象を既存の研究成果を手がかりとして確認した。続いて、冬季五輪のアジア開催地である韓国平昌、中国北京に加え、ロシアのソチ、日本の札幌、長野について地理的環境の比較を行い、どのような類似

性・相違性があるのか、比較検討した。それをふまえ、「地理探究」の位置付け、単元構想に関連する学習指導要領の内容の確認を行い、知識・技能、思考力・判断力・表現力等の内容に合わせた単元構想を示した。さらに、その単元構想の意義を述べた。最後に単元構想の新規性と有効性について触れておきたい。

新規性は、単なる観光的事象の分布傾向の認識に留まらず、それに関係する地域問題あるいは地球的課題に気付かせ、現状、要因、解決を思考・判断するような学習構造を示した点にある。観光は、今後も有力な産業となりえるものである。他方で、過度な観光開発の結果、地域に負の面を与える可能性がある。今回は、持続的な観光開発のために、開発と保全のバランスが必要なことを気付かせるねらいがあった。

有効性は、地理探究の単元構想において、地理総合の学習成果はもちろん歴史総合の学習成果も活かすことを意識した点である。その結果、地歴融合の視点が、重要であることを再認識できる機会となる。

加えて、高度な思考・判断の学習経験が、将来、活かさせることを期待したい。札幌は、2030年の冬季五輪の開催地招致を目指して準備している。こうした学習の経験が、次に自分事として捉える機会となりうる。今後の冬季五輪の誘致を考えた場合、いかに地域環境への負担軽減をできるか、という点が重要となってくるだろう。開催地の決定には、地域の支持率¹⁾の状況も含まれる。よって、適切な判断をするために、市民(国民)の冷静な対応が欠かせない。こうした場面に、今回の学習経験(単元構想)は応用的側面として貢献できるものと考えられる。

今後の課題は、単元構想の実現に向けた詳細な学習指導案の作成等について引き続き検討を重ねていきたい。

注

- 1) 北海道新聞社の調査(2019年2月)によれば、五輪招致の賛成が53%(反対46%)となっている(北海道新聞2019年3月3日付記事)。

文 献

- 1) 神田孝治他編：『スポーツの空間』、『レジャーの空間』ナカニシヤ出版、18-79、2009.
- 2) 碓井照子編：「地理総合」ではじまる地理教育 持続可能な社会づくりをめざして、古今書院、2018.
- 3) 井田仁康：新設科目「地理探究」と交通・通信、観光、新地理第66巻第3号、59-67、2018.
- 4) 井田仁康他編：21世紀の教育に求められる「社会的な見方・考え方」、帝国書院、2018.
- 5) 菊地俊夫：「地理探究」における観光教育の存在意義、新地理第66巻第3号、81-85、2018.
- 6) 工藤康宏、野川春夫：スポーツ・ツーリズムにおける研究枠組みに関する研究 — “スポーツ”の捉え方に着目して—、順天堂大学スポーツ健康科学研究第6号、183-192、2002.
- 7) 和井田清司他編：新版 中等社会科の研究「地理総合」「歴史総合」「公共」の可能性と課題、三恵社、2018.